「改革」の遠近

平田諭治
教育学系講師

社会を「改革」する大学から，社会に「貢献」する大学へ。いつのまにか大学と社会の対峙的な緊張関係は鳴りをひそめ，「改革」の矛先は当の大学自身に突きつけられている。両者の関係が，少なくとも本学の発足をめぐって鋭く問われていたことは，宮寺氏の論考から確認される。「大学院大学」への再編構想に既視感をぬぐえないとする同氏の文章は，同時代人としての煩悶と焦燥，教育と研究の根幹にかかわる懸念に発露している。大学に職をえて数年，かかる同時代的実感などもつはずもない私も，その問題提起には賛同するところが少なくなかった。学士課程教育にたいする大学人の責任意識の希薄化など，とくにそう思う。

それでも各学群の教育改革にかんする諸論考を通読すると，いくぶんなりともそうした危惧は解消され，刺激されるところは大であった。高・大を橋架するリメディアル教育としての「数学序論」のとりくみ（寺本氏），少人数のグループ学習を導入し，良質な医療提供をめざす医学教育のカリキュラム案（庄司氏）など，とりわけ印象深い。いずれも学問の高度専門化と高等教育の大衆化という，アンビバレントな事態のなかでの試みだが，たんに社会的要請にこたえるというだけでなく，矛盾に満ちた社会をみずから切りひらいていこうとする，主体的人間の育成へとつながるものと考えたい。

ただ一年生のクラス担任をしていて痛感するのは，学生へのまなざしが「学力低下」「若者気質の変化」といった言説に過剰に支配されてしまうと，学ぶ主体としての普遍的な姿がみえにくくなる，ということである。「大学の授業って，おもしろい」と，ある学生はいい，高校までとはちがう知的興奮を話してくれた。「わかった！」「なるほど」という爽快感の継起は，いずれ学びの更新へとみずからを駆りたてる。このことは，大学人が研究活動を通して味わう探究や発見の快感と，さほど径庭はない。そのような知のいとなみを導くような授業でありたい，とつねづね思う。食傷気味に「改革」が連呼されるご時世だが，足元からの小さな「改革」は，各人において不断に進行中であることも強調しておきたい。

（ひらたゆうじ　日本教育史）